福島県・白河市・二本松市主催「新島八重の生涯と戊辰戦争」展について

同志社社史資料センター社史資料調査員　小枝　弘和

同志社の恩人の故郷、福島県

同志社にとって福島県は特別な土地である。なかでも会津は新島襄の妻・八重と、同志社創立者のもう一人で八重の兄・山本覚馬の故郷である。今から137年前、覚馬の力なしでは同志社が誕生することはなかった。また、八重が妻として、また新島家の一人として、家族の責務を十全に担うことが無ければ、新島が全国を東奔西走し、伝道や同志社大学設立運動に邁進することは出来なかった。福島県は初期の同志社を支えた人々の故郷であり、同志社の恩人の故郷である。

2011年3月11日は日本国民誰もが忘れられない一日であった。東日本大震災は東北全域に深刻な被害をもたらし、地震と地震による津波で多くの方々の尊い命が失われた。この想像を絶する被害にどれほどの人々が心を痛めたであろうか。もちろん福島県も例外ではなかった。海から数キロ離れた場所にまで津波が到達し、合わせて福島第一原子力発電所の事故が被害を一層深刻化させた。

大震災から3ヶ月後、会津若松で聞いた状況は深刻であった。観光産業が盛んな会津若松であるが、今でこそ観光客も戻りつつあるものの、震災直後は観光客が通常の4分の1に激減していた。今年でさえ、津波被害のあった浜通り地区では、瓦礫が撤去された段階に達したにすぎない。既に震災から一年半の月日が経ているが、福島県はまだ復興の端緒に着いたばかりである。復興はこれからである。

2013年大河ドラマは「八重の桜」

今から3年前の2009年秋学期、同志社社史資料センターでは「新島八重の生涯―進取と矜持―」をテーマとした企画展を実施した。その時、資料調査と借用をかねて会津若松を訪れた。初見にも関わらず、福島県立博物館、会津若松市立会津図書館、若松城天守閣郷土博物館、会津武家屋敷の各担当者には本当にお世話になった。温かく迎えてくださり、会津の歴史を御教示いただき、企画展終了後も変わらぬ交流を続けてくださっていた。その最中に起こったのが今回の大震災である。単に被災地というだけでなく、これまでの関係から何か貢献できないかと思案していたが、行動に移すきっかけがなかった。しかし、予想もしなかった展開となった。2013年大河ドラマ「八重の桜」放映決定である。

震災から2ヶ月を経た2011年5月30日、2013年の大河ドラマのタイトルは「八重の桜」、主人公は「新島八重」という報道があった。同志社は震災復興にエールを送るというNHKの番組製作の趣旨に賛同し、NHKと福島県への協力を惜しまない旨の発表を行った。以降、NHKはもちろん、会津若松などからも大河ドラマにまつわる様々な仕事が舞い込んでくるようになった。そして、「八重の桜」の制作発表から半年後、本年最大となる仕事の依頼がやってきた。福島県からの依頼である。

福島県の観光産業復興のために

2011年12月23日、福島県観光交流局観光交流課の吉田紀之氏と高橋保明氏がセンターを訪れた。八重の資料展示会への協力依頼である。当日二人が作成した資料が手渡された。その展示案は、観光という観点から構成されていたこともあり、資料を貸し出す立場から見れば、展示施設とその環境に不安要素があった。しかし何よりも目を見張るべきは、何としてでも八重の展示を実施したいという2人の熱意が込められていたことである。確かに、「見せる」ことを意識した観光向けの企画案ではあるが、それは八重に関する文献を可能な限り収集し、精読し、史実を押さえていなければ作成できない内容であった。福島県の復興のために全力を尽くすという2人の覚悟が込められていた。

センターはこの企画案を受けて、すぐさま資料借用に関する全面的な協力と、企画展の企画、立案、実施の援助として社史資料調査員を派遣することを約束した。このようにして福島県への協力が確定し、物的、人的協力を行うことになった。

展示のコンセプトは覚悟と矜持（プライド）

とはいえ、この度の福島県での展示は八重を扱うだけではない。福島県が独自に所有する歴史的財産も八重の展示と併せて実施することが県の意向であった。つまり、八重と八重も戦った戊辰戦争が企画のテーマである。そこで県が候補地として既に選んでいた場所が白河市と二本松市での開催であった。

白河市は東北の戊辰戦争の最初にして最大の激戦地区であった。奥羽越列藩同盟の旗のもとに集まった諸藩と新政府軍の戦いが100日もの間繰り広げられた。白河口の戦いである。東北の玄関口を守る同盟軍と平定を目指す新政府軍が衝突したときに見せた両軍の矜持（プライド）と、鶴ヶ城籠城戦の時や新島家のひとりとして襄の妻として振る舞う際に見せる八重の矜持は、「なにか」を守るという意味で共通する。この矜持が白河展での展示のコンセプトとなった。

一方、二本松市でも激しい戦闘が繰り広げられた。白河口の戦いなどに主力をそがれていた二本松藩は、三春藩方面か

ら攻め込んできた新政府軍に横腹をつかれることになった。この時、兵力不足のために老人や少年に徴兵が及んだ。その少年兵を二本松少年隊と呼ぶ。彼らは藩の危機に際し、恐怖を抱くことなく、藩を守るために出陣した。その覚悟は、八重がゲベール銃の撃ち方を教えた白虎隊士の伊東悌次郎や弟・三郎の着物を身にまとい籠城戦に臨んだ八重の覚悟に通じる。その覚悟が二本松市での展示のコンセプトである。

同時期に三館で八重に関する展示を開催

ただし、福島県からの依頼の前には、若松城天守閣郷土博物館から先に資料借用の依頼が来ていた。同館では2012年9月14日から11月4日にかけて企画展「京都守護職拝命150年と新島八重」を開催する。これにあたり、篤志看護婦人会正装帽子、勲六等宝冠章、ワッフル・ベーカー、茶道許状など、八重を象徴する資料20点ほどの資料の貸し出しが、県の依頼が来る以前に既に決定していた。

白河会場（白河集古苑）

これを考慮して、県は白河市、二本松市での企画展を若松城天守閣郷土博物館の開催期間を合わせることで、福島県全体での盛り上がりを企図することになった。若松城天守閣郷土博物館からも、この案について理解と協力を得ることができた。会場は白河市の白河集古苑と二本松市歴史資料館と決定した。総合タイトルは「福島の地に流れる矜持と覚悟　新島八重の生涯と戊辰戦争」である。そして、各館での個別のテーマを決定した。白河市は「新島八重の生涯と戊辰白河口の戦い―譲れない心、それぞれの矜持―」、二本松市は「新島八重の生涯と二本松藩の戊辰戦争―それぞれの覚悟―」である。

二本松会場（二本松市歴史資料館）

若松城天守閣郷土博物館のある鶴ヶ城

同志社所蔵の八重コレクション―100点、故郷福島へ

今回、福島県が同志社から借用する資料は100点以上である。約半数ずつが各会場で展示される。各会場の戊辰戦争関連の資料も加えると、両館合わせて200点以上の資料が並ぶことになる。同志社の資料の中には過去に会津武家屋敷へ借用された資料が数点含まれるが、ほとんどの資料が福島県初上陸である。

さらに、これまで存在は知られていたが、一般公開が初めてとなる資料もある。センターでは3年前、「新島八重の生涯―進取と矜持―」展の準備の過程で、資料の調査・収集・整理を行ったが、時間的制約もあり、同志社所蔵の八重に関するすべての未整理資料を整理できなかった。今回、福島県で企画展を開催するにあたり、同志社女子大学の博物館の館園実習の実習生の力も借り、八重の未整理資料、特に新島家の写真資料の整理を行った。その中に八重が大切に所蔵していたと考えられる会津若松関連写真22点があり、そのオリジナルの写真が白河、二本松、会津の3ヶ所で一般に向けて初公開される。

篤志看護婦人会正装帽子

八重の洋服を再現―同志社女子大学と福島県川俣シルク―

また、同志社女子大学生活科学部の清水久美子教授の指導のもと、有志の学生らが力を合わせて再現した八重の洋服も展示の目玉である。清水教授は以前女性宣教師の洋服を再現した実績がある。そこで、学校法人同志社全体の協力体制を示すべく、知的財産や学術を利用した協力を得られないかと女子大広報課に相談したところ、広報課も同様の案を既に持っており、すぐさま清水教授へ打診し、清水教授の快諾を得て実現の目処がついた。清水教授は授業で八重の洋服の再現を扱われ、授業を受ける学生と有志の学生を集めて作成に取り掛かられた。福島県の吉田氏が再び来学した際に清水先生を一緒に訪問した時には、夕方遅くになっても部屋に残り、多くの学生が洋服の作成に取り組む光景を目にした。清水教

再現された八重の洋服

授と彼女たちの技術と知識と熱意がなければ洋服の再現は実現しなかったであろう。

加えて、もうひとつ協力がなければ実現しなかったものがある。それは福島県川俣町の協力である。洋服の素材は全て川俣の特産であるシルクを使用している。いわば再現された洋服は同志社女子大学と福島県川俣町のコラボ作品である。シルク使用の発案は吉田氏である。この案を耳にしたとき、川俣シルクで洋服を製作できれば、大学の復興支援のありかたを考えるひとつのモデルになると思われ、吉田氏に調整をお願いし、実現に至った。

なお、再現された洋服は二本松会場で展示される。企画展終了後は福島県に寄贈され、猪苗代湖にある旧有栖川宮威仁親王別邸天鏡閣で恒久的に展示される予定である。

おわりに

福島県の方々と話をすると「会津の三泣き」ということをしばしばうかがうことがある。一つ目は会津の保守性や排他性に泣き、二つ目は住んでいるうちに人々の温かさに触れて泣き、三つ目は会津を離れるときはその離れがたさに泣くという、会津に住む人々の人情を表す言葉である。八重や覚馬もこうした故郷の人柄だったのかもしれない。そして、おそらくこれは福島県全体にもある程度通じることではないかと思われる。もし展示に興味をもたれたら是非とも福島県へお越しいただき、展示をご覧いただければ、今回の企画展に関わったものとして本望である。八重への関心を深め、大河ドラマ「八重の桜」への興味を深めていただけることは、直接的であれ間接的であれ、福島県の復興に繋がる。そして、できれば地元の人々に触れ、福島県が誇る美味しいお酒やお米、果物を食していただきたい。福島県が持つ豊かな財産をきっと堪能していただけるものと信じている。